

光のいのち

文＝稲葉俊郎 画＝稲葉哲郎



宇多田ヒカルさんの「Fantôme」を毎日聞いています。外へと意識が向きやすい日常の中で、一人音楽を聴くのは、内へと意識が向かう大切な時間です。Fantômeはフランス語で幻や気配を意味する言葉。宇多田さんが「Fantôme」としか表現できなかったものは何なのでしょう。アルバムを繰り返し聴いていると、いのちの重なり合いを感じます。宇多田さんが新曲を産み出し、表舞台に出てこられたのは、彼女の長い喪が明けたのだと思いました。生者が死を受け取る時、表面ではわからなくとも、深層では喪に服すプロセスが進行しています。死を生の器の中に受け取るためには、相応の時間が必要だからです。

自分は医師として、生や死に接することが多く、日々考え続けています。幼少時に病弱だったことも死への感受性を育む土台になっています。自分にかかわったすべての人のおかげで自分のいのちがつながっていると思います。愛の力がいのちの深層を支えていることは忘れることができません。

いのちは光のようなものだと思います。目に見える物質は、同じ場所に同時に存在できません。身の回りのももの積み上げたり横に並べたりしているはずですが、ただ、光は同じ場所に存在できます。太陽光も炎の光も蛍光灯の光もPC画面から発せられる光も、すべては重なり合っています。光は無数に重なることができ、重なるほど重なるほど明るくなり、光は同じ場所に同時に存在できるのです。目に見える物質世界とは異なる性質を持ちます。

病弱なため、子どもなりに真剣にいのちのことを考えていました。その時から思うのは、いのちはなくなくなったように見えても、光のように同じ場所に存在し重なり合っている。受け取れば受け取るほど、光が重なり合うように明るく光を発し輝くのだ、ということでした。

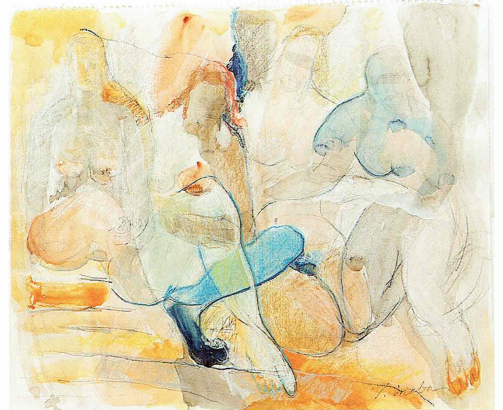
現在は、膨大な時の流れの上で存在していますし、遙かな未来へもつながっています。それは、時の流れとともにいのちが光として無数に重なり合う世界です。

木の存在のあり方は生と死の深い関係を教えてくれます。木は植物の生命体ですが、植物細胞から構成されます。動物細胞は軟かい細胞膜で細胞が仕切られていますが、動物と異なり、植物細胞は細胞壁という硬い壁で囲まれているため、植物細胞は硬い構造を作れます。木の中心にある幹は芯材とも呼ばれ、時とともに年輪を刻み木の構造を支える場所です。実は、そうして木を支える中心の幹は、生きた細胞ではなく死んだ植物細胞が残ったものなのです。生きる仕事を終えた植物細胞は、死んだ植物細胞として骨格だけが中心に残ります。硬い細胞壁の特徴を利用し、死を迎えた細胞は木の中心となり、骨格として全体を支えているのです。死を迎え、中心を貫く強靱な芯へと変化した植物細胞の表面に、少数の生きた植物細胞が存在し、表面が分裂増殖し続けて成長して、木は存在しているのです。表面を構成する生きた植物細胞も、その役割を終えたりレリーのように役割を交代し、幹として中心から全体を支えます。こうした死と生との二重の構造の中で、1本の木の全体は生きています。

木を見るたびに、こうした木の在り方は人間でも同じだろうと思うのです。この世のすべてのものは、過去から託されたもの。文化も芸術も知識も：中心を死者が支えていて、生きている人が表面の世界を受け継いでいます。今生きているすべての人、時が来ればいずれ死者となり、生者を中心から芯として支えることに参加していくのです。

気がどうとも気づくまいとも、いのちはそうして死に支えられ受け継がれてきました。死をしつかり受け取った時、死と生は光として重なり合い、生はさらに深みと厚みを増し、成熟していきます。宇多田さんが歌う姿を見た時、母のいのちが光として受け渡され、重なり合っているのを感じました。

芸術や音楽は、深い悲しみを別の形へと変容させる秘儀のようなものです。故人の思いを受け取りながら、さらに次のいのちへ伝えていくために、自分の魂が震えるのを感じた時、深い場所できているプロセスは、気配としてのみ感じることができるようになるのです。それがいのちの光源なのです。



いのちが「見えなくなっても」、そこにはたくさん重なり合っていて、光のように存在している。その光を受け取り感じる事ができた時、人は魂が震えるのかもしれない



Profile
稲葉俊郎

いなばとしろう。医師。東京大学医学部付属病院循環器内科助教。東京大学医学部山岳部の監督、東京大学医学部の山岳診療所（滝沢診療所）も従事。さまざまな伝統医療、補完代替医療、民間医療への造詣も深い